

陸游の詩に現れた「太平」の諸相

— 陸游晩年の一面 —

森 博 行

序 文

1

わたしは「邵雍と『太平』—『芳草』余論⁽¹⁾」と題する論稿において、北宋の道学者・邵雍（一〇一—一〇七七、字は堯夫）の詩に現れた「太平」について卑見を述べた。「太平」という語は簡単にいえば、現今の日本語の平和という語に相当すると考えていいと思われるが、右の問題を考えていたとき、南宋の陸游（一一二五—一二〇九、字は務観、号は放翁）の詩にも、かなり頻繁に「太平」という語が現れるのに気づいた。どの程度の数量か、実際に調査してみたところ、一〇五例あった。⁽²⁾ 陸游の詩は、一万首近く残っているから、一〇五という数量は、パーセンテージからいえばそれほど高いものではない。問題は「太平」の中身である。「太平」という語が使われている陸游の作品を読んでいくと、同じ「太平」という語でも詩によって意味内容そのものがちがうのである。大きく分けて三種類の意味がある。箇条書きすれば次のとおりである。

(一)、金を撃退した上での中国全土の平和。⁽²⁾

(二)、中国南半分の平和。

(三)、心の平和。

(一)と(二)が外的(公的)世界の「太平」であるのに対して、(三)は内的(私的)世界の「太平」ということができる。後述するとおり、陸游は邵雍の「太平」の詩句について熟知していた。しかしながら、「太平」という言葉は、たとえば『莊子』第十三「天道」篇に、「此れを之れ太平と謂い、治の至りなり」とあるごとく、もともと至上の政治つまり外的世界を意味するものであり、邵雍の場合も、すべて外的な意味での「太平」であって、陸游のようにな内的な意味で「太平」という語が使われることはなかった(拙論「邵雍と『太平』参照」。陸游の詩における「太平」の諸相、今回はこの点に関して考えることが目的である。なお、この論稿の底本は、錢仲聯校注『劍南詩稿校注』(上海古籍出版社 一九八五年九月)であり、陸游の詩の制作年代・制作場所などは同書の「題解」による。

第一節 陸詩に現れた「太平」の語義 その一 中国全土の平和

『劍南詩稿』によれば、陸游がはじめて「太平」という言葉を用いたのは、高宗の紹興二十七年(一一五六)、三十二歳のときの作「新夏感事」(巻一 第一冊二頁)においてである。

百花過盡綠陰成 百花 過ぎ尽くして 緑陰成り

漠漠爐香睡晚晴 漠漠たる爐香 晩晴に睡る

病起兼旬疎把酒 病より起きて 兼旬 酒を把ること疎れに

山深四月始聞鶯 山深くして 四月 始めて鶯を聞く

近傳下詔通言路

近ごろ伝う 詔を下して言路を通ずと

已卜餘年見太平

已に卜す 余年 太平を見んことを

聖主不忘初政美

聖主 忘れず 初政の美

小儒唯有涕縱橫

小儒 唯だ涕の縦横たる有り

この詩の「太平」に対して、一海知義氏は「平和。金を撃退した上での中国全土の平和⁽³⁾」と解釈された。「小儒」は作者の自称。「新夏感事」以外にも「太平」を「中国全土の平和」の意味で使った作品がある。

阿綱學書蜩滿幅

阿綱は書を学んで 蜩は幅に満ち

阿繪學語鶯轉木

阿繪は語を学んで 鶯は木に轉る

截竹作馬走不休

竹を截りて馬を作り 走りて休まず

小車駕羊聲陸續

小車に羊を駕して 声は陸續たり

書窗澆壁誰忍噴

書窓 壁を澆^いすも 誰か噴るに忍びんや

啼呼也復可憐人

啼呼するも也た復た人に憐れまる可し

却思胡馬飲江水

却って思う 胡馬 江水を飲まんと

敢道春風無戰塵

敢て道^いわんや 春風に戦塵無からんと

傳聞賊棄兩京走

伝え聞く 賊 両京を棄てて走り

列城爭爲朝廷守

列城 争いて朝廷の為に守ると

從今父子見太平

今從^より 父子 太平を見ん

花前飲水勿飲酒

花前に水を飲んで 酒を飲むこと勿けん

「小兒輩の行在^{みんざい}に到るを喜ぶ」(卷一 第一冊四九頁)と題する詩である。高宗の紹興三十二年(一一六二)、陸游

三十八歳のとき、仮の都・臨安（杭州）で作られた。第一句の「阿綱」、第二句の「阿絵」は、それぞれ陸游の第三番目の男子・子修と第四番目の男子・子坦の幼名（『劍南詩稿校注』の説）。第九句の「賊 両京を棄てて走る」は、金の世宗・完顔雍が紹興三十一年（金は大定元年）十二月、西京の洛陽を宋に奪い返された後、引き続きて東京の汴京をも棄てて金の国都・中都にもどったことを指すと思われる。したがってこの詩における「太平」は、明らかに「中国全土の平和」の意味である。なお、最後の一句「花前に水を飲んで 酒を飲むこと勿けん」について補足しておくと、馮延巳（九〇三―九六〇）の「鵲踏枝十四首・其の二」（『陽春集』）の前関に、「誰か道わん 閑情 抛棄して久しと。春の来たれるに至る毎に、惆悵たるは旧に依る。日日 花前 常に酒に病む。辞せず 鏡裏に朱顔の瘦するを」とうたわれているとおり、「花の前」では酒を飲むものであるが、陸游は、この後は美しい花を前に酒を飲んで、傷心を慰めることもあるまいといっているものであり、「水を飲む」という表現には、『論語』卷七「述而」篇の孔子の言葉「疏食を飯らい水を飲み、脰を曲げて之れを枕とす。樂しみ亦た其の中に在り」が意識されているであろう。世界が「太平」でありさえすれば、「樂しみ」はどこにでもあるというところである。

更に孝宗の淳熙四年（一一七七）、五十三歳、成都における作品「劍南の西川門に登りて感懷す」（卷八 第二冊六四四頁）の一聯

諸公勉畫平戎策 諸公 勉めて画せよ 平戎の策

投老深思看太平 投老 深く思う 太平を看んことを

や、寧宗の開禧元年（一二〇五）、八十一歳、山陰における作品「夢中の作二首・其の二」（卷六十四 第七冊三六三頁）の一聯

祥符西祀曾迎駕 祥符の西祀 曾て駕を迎えしに

惆悵無人説太平 惆悵す 人の太平を説く無さを

における「太平」も同様である。「祥符の西祀」は、北宋・真宗の大中祥符四年（一〇一一）、太平の世を天下に示す国家の行事として西岳を祀ったことを指す（『宋史』巻八「真宗三」）。

しかしながら、西岳は華山であり、陸游の時代は金国に占領されていた。

昔我初生歲 昔 我れ 初めて生まれし歲

中原失太平 中原 太平を失す

寧知墓木拱 寧んぞ知らん 墓木 拱して

不見塞塵清 塞塵の清むを見ざるを

京洛無來信 京洛 來信無く

江淮尚宿兵 江淮 尚お宿兵あり

何時青海月 何れの時にか 青海の月

重照漢家營 重ねて漢家の營を照らさん

これは、慶元四年（一一九八）、七十四歳のとき、山陰で作られた「北望」（卷三十六 第五冊二三五九頁）と題する詩である。陸游が生まれたのは北宋・徽宗の宣和七年（一一二五）十月十七日。「十月十七日は、予が生日なり（以下、省略）」（卷三十三 第四冊二一九九頁）と題する七言絶句があり、後半の一聯に「宣和七年冬十月、猶お是れ中原 無事の時」と詠じており、「昔 我れ 初めて生まれし歲、中原 太平を失す」は、実際には宣和七年の翌年すなわち欽宗の靖康元年、都の汴京が金国によって陥落したことを指す。「青海」は、現在の青海省ココノール湖。異民族との接触地点であったので兵營が置かれていたが、「漢家」（漢代）においては中国の領土であった。また開禧二年（一二〇六）、八十二歳のとき、やはり山陰で作られた「賽神」（卷六十七 第七冊三七七四頁）と題する詩において次のように詠じた。

落日林間簫鼓聲

落日 林間 簫鼓の聲

村村倒社祝西成

村村 社を倒して 西成を祝う

扶翁兒大兩髻髭

扶翁の兒 大なり 兩髻髭たぐ

溉水渠成千耦耕

溉水の渠 成る 千耦耕

家受一廛脩本業

家は一廛を受けて 本業を修め

鄉推三老主齊盟

郷は三老を推して 齊盟を主らしむ

日聞淮潁歸王化

日びに聞く 淮潁 王化に帰すと

要使新民識太平

要かならず新民をして太平を識しよさしめん

第二句の「倒社」は、お社が倒壊せんばかりに人々がぎっしり集まること、最後の句の「新民」は、次の時代の人間のことであり、「識」すとは、正史にしろすのである。

このように陸游は、「何れの時にか 青海の月、重ねて漢家の營を照らさん」、「要らず新民をして太平を識さしめん」と、「中国全土の平和」を夢みながら、生涯かけて「中国全土の平和」の実現を願って「太平」という言葉を使った。しかし、「中原 太平を失す」、失われた中原が回復され、「新民 太平を識す」、次代の人間が歴史書に「太平」を回復するとしるすということではなく、彼の時代に再び「中国全土の平和」が現出することのなかったのは、周知のとおりである。

第二節 陸詩に現れた「太平」の語義 その一(補) 「太平」の氣象

第一節において述べたとおり、陸游は「中国全土の平和」の意味を込めて「太平」という言葉を使ったが、彼の詩

にはまた「太平に象有り」とか、「太平の氣象」とかいう表現がよく現れる。もつとも最初に詠じたのは、次のような詩である。

殘年流轉似萍根 殘年 流転して 萍根に似たり

馬上傷春易斷魂 馬上 春を傷み 魂を断たれ易し

烘暖花無經日蕊 烘暖 花に無し 経日の蕊

漲深水過去年痕 漲深 水は過ぐ 去年の痕

迷行毎問樵夫路 迷行すれば 毎に問う 樵夫の路

投宿時敲竹寺門 投宿せんとして 時に敲く 竹寺の門

不信太平元有象 信ならずや 太平 元と象有ること

牛羊點點散煙村 牛羊 点点として 煙村に散ず

この詩の題名は「馬上」(卷三 第一冊二一六頁)。孝宗の乾道八年(一一七二)、四十八歳、通判(副知事)として暮らしていた夔州から、四川宣撫使・王炎の招聘を受け、幹弁公事兼檢法官としてはるか西北のかた興元府(陝西省漢中市)に赴くべく、梁山県から鄰山県に向かう道中での作である。この興元府への赴任にさきだつ、夔州への赴任は、陸游にとってあまり氣乗りしなかつたものようであり、果たして夔州通判として過ごした一年余りの生活は、「找不到精神上的寄托」(精神的寄りどころを見つけ出すことができなかった)というさびしい状態であつた。

「人生 未だ死せずんば 信に知り難し、夔州に憔悴して 餐糸を生ず。何れの日か 画船 桂楫を揺らし、西湖に却つて賦せん 探春の詩」。これは乾道七年(一一七二)正月、四十七歳のとき、夔州において作られた「蹋蹠」(卷二 第一冊一八四頁)と題する詩の結びの四句である。「西湖」は、故郷山陰にある鏡湖を指す。山陰の西方に位置するので「西湖」と表現した。陸游は鏡湖近くの三山に卜居していたのである(第八節参照)。また「蹋蹠」は、夔

州の人々が正月七日（人日）、諸葛武侯孔明（二八一—二三四）ゆかりの八陣磧に出かけて遊ぶという風俗である。

「夔州の人、諸葛武侯を重んじ、人日を以て城を傾けて八陣磧の上に出づ、之れを蹋磧と謂う。婦人は小石の穿つ可き者を拾い、綵索を以て釵頭に繋ぎ、以て一歳の祥と為す。府帥は磧上に宴す」（『欽定古今圖書集成 第三冊』鼎文書局 二六四頁）『曆象彙編歲功典』二十五卷 人日部26に引く所の『図経』。歴史を遠く三国時代にまでさかのばれば、陸游の故国は呉の国、それに対して諸葛孔明は蜀の人。しかも孔明は魏の曹操（一五五—二一〇）を相手に呉と蜀が連合して赤壁において戦いをいどんだときの総司令官である。陸游は孔明に対して、親近感とふかい敬慕の念を抱いていたにちがいない。彼は淳熙二年（一一七五）、五十一歳、四川制置使の范成大（一一二六—一一九三）に招かれて成都府路安撫司參議官兼四川制置使參議官として成都にいたが、このおり新都に旅行したとき、「諸葛丞相の廟に謁す」（巻六 第二冊五一七頁）と題する詩を作り、次のように詠じた。

漢中四百天所命

漢中四百 天の命ずる所

老賊方持太阿柄

老賊 方に太阿の柄を持つ

區區梁益豈足支

區區たる梁益 豈に支うるに足らんや

不忍安坐觀異姓

安坐して異姓を觀るに忍びず

遺民亦知王室在

遺民も亦た王室の在るを知り

閭位那干天統正

閭位 那ぞ天統てんとうの正を干おかさんや

公雖已沒有神靈

公 已に没すと雖も 神靈有り

猶假賊手誅鍾鄧

猶お賊手を仮り 鍾鄧を誅す

前年我過沔陽祠

前年 我れ沔陽べんやうの祠に過へぎり

再拜奠俎衰淚迸

再拜して俎すを奠めれば 衰淚迸る

潔齋請作送迎詩 潔齋して送迎の詩を作らんことを請う

精忠大義神其聽 精忠の大義 神 其れ聴きたまえ

陸游は、「遺民も亦た王室の在るを知り、閩位 那ぞ天統の正を干さんや」の一聯から判断して、蜀を正統の王朝と考え、諸葛孔明はこの正統の王朝に忠義を尽くした人物であるとみていた。また「公 已に没すと雖も 神靈有り、猶お賊手を仮り 鍾鄩を誅す」という一聯から判断して、陸游は『三国演義』のファンであったかも知れない。

『三国演義』の第一百十六回のタイトルが「鍾会 兵を漢中道に分ち 武侯 聖（靈驗）を定軍山に顕わす」（小川環樹 金田純一郎訳『三国志 第十冊』岩波文庫）となっており、亡霊の姿で諸葛孔明が登場するからである。陸游はこれほどまでに孔明に心を傾けていた。しかし、夔州における蹋碚の風習は、これが諸葛孔明に縁のあるものであるということが、陸游の知識になかったのか、自分が異郷にいることをいつそう感じさせるものであり、かえって郷愁をいざなうものにすぎなかった。ましてこの度の宦遊は、この夔州より更にはるか西北にある興元である。故郷の山陰はいつそう遠くなる。「残年 流転して 萍根に似たり、馬上 春を傷み 魂を断たれ易し」という冒頭の一聯は、このような思いに動かされて詠ぜられたのであり、彼の心を満たしていたのは郷愁であったであろう。ここで最後の一聯の前句「信ならずや 太平 元と象有ること」である。「象」という語は、「象伝」を初めとして、『周易』にそれこそ無数に現れる言葉である。「一闔一闢、之れを爰と謂い、往来窮まらざる、之れを通と謂い、見るれば乃ち之れを象と謂い、形あれば乃ち之れを器と謂う」、「天 象を垂れて、吉凶を見わし、聖人之れに象る」（ともに『周易』「繫辞上传」）。韓康伯は「一闔一闢」中の「象」に對して、「兆し見るるを象と曰う」と注釈を加えた。ところで「太平の象」は、『唐書』卷一百七十四「牛僧孺伝」などに記されている、唐の文宗と牛僧孺（七七九—八四七）との次のやりとりにもとづく。

（文宗）它日、延英（殿）に宰相を召見して曰わく、公等に太平に意有りや。何の道を以って之を致す、と。僧

孺曰わく、臣は待罪の宰相にして、康濟する能わず。然れども太平に亦た象無し。今、四夷は内擾せず、百姓は生業に安んじ、私室に彊家無く、上は壅蔽せず、下は怨讟せず。未だ至盛に及ばずと雖も、亦た治と為すに足れり。而して更に太平を求むるは、臣の及ぶ所に非ず、と。

「太平」というものには、本来「象」つまり兆しの現れることはないという。しかし、陸游は「牛羊 点点として煙村に散ず」という農村ののどかな光景を前にして、「太平に象無し」という言い伝えに疑念をさしはさんでいるのである。「牛羊」の語は、いうまでもなく『詩經』『王風』『君子于役』の「君子 役に于き、其の期を知らず、曷か至らん哉。鶏は時に棲り、日の夕べ、羊と牛は下り来たる。君子 役に于く、之を如何ぞ 思うこと勿からん」をふまえる。農村では日が暮れて、休息の時間が来れば、羊や牛も放牧からもどってくるという、のどかで規則正しい生活が営まれているという意味であり、第七句の「不信」は、反語に読むべきであろう。更に「太平に象有り」は、『劍南詩稿校注』（卷一 二一六頁）によれば、蘇軾（一〇三六—一一〇二）の「山村五絶・其一」にもとづく。蘇軾の詩は次のとおりである（『集註分類東坡詩』卷二十四）。

竹籬茅屋趁溪斜 竹籬 茅屋 溪を趁^かつて斜めなり

春入山村處處花 春は山村に入り 處處に花さかす

無象太平還有象 無象の太平 還た象有り

孤煙起處是人家 孤煙の起つ處 是れ人家なり

蘇軾は「孤煙の起つ」「山村」の「人家」を前にして、もともと「無象」のはずの「太平」にも「象有り」ではないかといった。ただ蘇軾の場合、「ひとすじの炊煙を太平のしるしと見るのは皮肉である」という、王安石の新法に対する軽い風刺が込められているのに対して、陸游の「太平の象」は切実であつた。もしかすれば自分の故郷・山陰の農村にも、いま「太平の象」が現れているかもしれない。いっそ思い切つて山陰の農村に帰ろうか。だがこれはあ

くまでも「太平の象」にすぎない。今の自分にとつてもっとも大事なことは、真の「太平」を実現することである。次に引用するふたつの詩は、このときよりずっと後の晩年、故郷にいたときの作品である。

歲暮常年雪正豪 歲暮 常年 雪 正に豪たり

今年暄暖減綈袍 今年 暄暖にして 綈袍を減ず

春回山園梅爭發 春は山園に回り 梅は争いて發き

睡足茆簷日已高 睡りは茆簷に足り 日は已に高し

倉庾家家儲旧穀 倉庾 家家 旧穀を儲え

笙歌店店賣新醪 笙歌 店店 新醪を売る

太平氣象方如許 太平の氣象 方に許くの如し

寄語殘胡早遁逃 語を寄す 殘胡よ 早く遁逃せよ

東巷西巷新月明 東巷 西巷 新月明かなり

南村北村戲鼓聲 南村 北村 戲鼓の聲

家家輸賦及時足 家家 賦を輸して 時に及んで足り

耕有讓畔桑無爭 耕に讓畔有りて 桑に争い無し

一村婚娉皆鄰里 一村 婚娉 皆な鄰里

婦姑孝慈均母子 婦姑 孝慈 母子に均し

兒從城中懷肉歸 兒は城中從り 肉を懷にして歸り

婦滌鎗釜供刀匕 婦は鎗釜を滌いて 刀匕に供す

再拜進酒壽老人 再拝して酒を進め 老人を寿げば

慈顔一笑温如春 慈顔 一笑 温きこと春の如し

太平無象今有象 太平の無象 今 象有り

窮虜何地生煙塵 窮虜 何の地に煙塵を生ずる

前の詩は、寧宗の開禧二年（一二〇六）、八十二歳のとき、山陰において作られた「冬晴」（卷六十九 第七冊三八七二頁）と題する作品であり、後の詩は、開禧三年（一二〇七）、八十三歳、同じく山陰において作られた「村落の間事を書す」（卷七十 第七冊三八九一頁）と題する作品である。前詩の「残胡」および後詩の「窮虜」はともに金の国を指し、彼らが中原から退いて本国に帰ることによつて、「太平の（気）象」は、現実の「太平」（中国全土の平和）となるというのである。「信ならずや 太平 元と象有ること、牛羊 点点として 煙村に散ず」と詠じたとき、「残年」と称してはいるが、まだ四十八歳であつた陸游の心は、故郷に帰るべきかどうか、ゆれていた。

第三節 陸詩に現れた「太平」の語義 その二 中国南半分（半壁）の平和

紛紛紅紫已成塵 紛紛たる紅紫 已に塵と成る

布穀聲中夏令新 布穀の声中 夏令新たなり

夾路桑麻行不盡 路を夾む桑麻 行きて尽きず

始知身是太平人 始めて知る 身は是れ太平の人なるを

これは、慶元元年（一一九五）、七十一歳、山陰において作られた「初夏」（卷三十二 第四冊二二四五頁）と題する十首連作の第一番目の作品である。陸游は彼れの周辺的生活空間、故郷山陰の農村の生活の中で、己れは「太平の

人」といつているのだが、陸游がここで「太平」といったのは、対外的に一時休戦状態にあること、国内的に稔りの豊かなこと、厳しい税の取り立てがないこと、そしてこのような明るい環境のなかで人々が物心両面にわたって豊かに暮らしていることなどによる。しかし、全中国に目を向けるとき、中国は完全な「太平」を回復してはいなかった。したがってこの詩における「太平の人」は、正確には「半壁の太平の人」である。しかし、「半壁の太平」であるけれども、陸游は確かに「太平」を楽しんでいた。

「北園の雜詠十首・其の五」(卷三十五 第五冊二二八九頁、慶元二年、一一九六、七十二歳)

小槽酒熟豚蹄美 小槽に酒熟し 豚蹄は美く

剩與兒童樂太平 剩る兒童と太平を楽しむ

「晩歩」(卷三十五 第五冊二二二一頁、慶元三年、一一九七、七十三歳)

藥餌扶垂老 藥餌 垂老を扶け

耕桑樂太平 耕桑 太平を楽しむ

「致仕の後、歳事に望み有り、欣然として詩を賦す」(卷三十九 第五冊二五〇九頁、慶元五年、一一九九、七十五歳)

聖時恩厚賜餘生 聖時 恩厚く 余生に賜い

日與鄉閭樂太平 日び郷閭と太平を楽しむ

「風雨」(卷四十四 第五冊二七四四頁、慶元六年、一二〇〇、七十六歳)

七十年來樂太平 七十年來 太平を楽しむ

白頭父子事春耕 白頭の父子 春耕を事とす

「晨雨」(卷四十六 第六冊二八〇九頁、嘉泰元年、一二〇一、七十七歳)

處處青秧滿 処処に青秧満ち

長歌樂太平 長歌して太平を樂しむ

〔園中の作二首・其の二〕（卷四十八 第六冊二九一六頁、嘉泰元年、一二〇一、七十七歲）

書生本自安窮處 書生 本と自ら窮處に安んじ

豐歲何妨樂太平 豐歲 何ぞ妨げん 太平を樂しむを

〔病より起つ初夏〕（卷七十六 第八冊四一四八・四一四九頁、嘉定元年、一二〇八、八十四歲）

地偏無客談閑事 地偏にして 客の閑事を談ずる無けれども

麥熟逢人樂太平 麥熟して 人に逢い 太平を樂しむ

また第二節において「太平の象」ということを指摘したが、次のように詠じている。

〔雜興三首・其の二〕（卷十七 第三冊一三三三頁、淳熙十二年、一一八五、六十一歲）

太平氣象君知否 太平の氣象 君 知るや否や

盡在豐年笑語中 盡く豐年 笑語の中に在り

〔客を逐えて大浪灘上に至る〕（卷二十 第三冊一五二七頁、淳熙十五年、一一八八、六十四歲）

太平豈無象 太平 豈に象無からんや

麥飯家家香 麥飯 家家に香ばし

〔春社四首・其の二〕（卷二十七 第四冊一八八三頁、紹熙四年、一一九三、六十九歲）

太平氣象吾能說 太平の氣象 吾れ能く説く

盡在鑿鑿社鼓中 盡く鑿鑿たる社鼓の中に在り

〔春晚の村居〕（卷二十九 第四冊二〇〇三頁、紹熙五年、一一九四、七十歲）

太平有象無人識 太平 象有るも 人の識る無く

南陌東阡擣麝香 南陌 東阡 麝しやうを擣ういて香しやうばし

〔幽居初夏四首・其三〕（卷四十三 第五冊二六七五頁、慶元六年、一二〇〇、七十六歳）

太平端有象 太平 端またに象有り

誰與畫吾村 誰か与たらに吾が村を画かん

このように陸游は、故郷の農村の生活において「太平の象」に心を躍らせ、「半壁の太平」を楽しんでいた。「農家 農家 楽しく復た楽し、比せず 市朝の争奪の悪しきに」（「岳池の農家」卷三 第一冊二一八頁）。これは、乾道八年、一一七一、四十八歳のとき、夔州から興元府へ赴任する道中、岳池を通ったおりに作られた詩の一聯である。

陸游には本来、農村の生活のにおいがしみついていたのである。この点に関して村上哲見氏は、次のように言われた。「彼は官途において決して成功したとはいえず、また農村における生活も決して裕福、安楽ではなかった。それにもかかわらず、その晩年の詩が常に明るい調子を失わないのは、不遇とか蹉跌つまつといったことを超越して、さまざまな体験を経ながらも、結局は父祖伝来の地に帰農しえたことを、すなおに喜び、誇りとする気持ちになつていたからだと思う」⁽⁶⁾。更に卑見をふたつつけ加えれば、ひとつは、思想史の系譜からみて、邵雍に典型的にみられるこの地上こそ楽園であるという北宋以来の思想的伝統（拙論「邵雍と『芳草』」参照）が、陸游にも受け継がれていたからである。

「小舟にて紅橋の南より吉沢を過ぎ、三山に帰る二首・其の一」（卷二十三 第四冊一七〇九頁、慶元元年、一一九五、七十一歳）

霏霏寒雨數家村 霏霏たる寒雨 數家の村

鷄犬蕭然畫閉門 鷄犬蕭然として 昼も門を閉とざす

它日路迷君勿恨 它日 路に迷うも 君 恨むこと勿かれ

人間隨所有桃源 人間 隨所に桃源有り

〔北園の雜詠十首・其の二〕（卷三十五 第五冊二三八頁、慶元二年、一一九六、七十歳）

西村林外起炊煙 西村 林外 炊煙起こる

南浦橋邊繫釣船 南浦 橋邊 釣船を繫ぐ

樂歲家家俱自得 歳を樂しむ家家 俱に自得す

桃源未必是神仙 桃源 未だ必ずしも是れ神仙ならず

「人間 隨所に桃源有り」といい、「桃源 未だ必ずしも是れ神仙ならず」というのは、要するにこの世界こそ樂園の地ということである。北宋時代以来の樂觀的な雰囲氣が、まだ亡国の兆候はみられない陸游の時代にいたつてもみちていたのである。ちなみに南宋の滅亡（一二七九）を十年ほど前にしてなくなった劉克莊（一一八七—一二六九）のごときは、「書事十首・其の四」（『後村先生大全集』卷三十一）において、次のように詠じている。

生長承平玩細娛 承平に生長し 細娛を玩ぶ

變興倉卒不支吾 變興こり 倉卒として 支吾せず

輕裘太守拋鈴下 輕裘の太守 鈴下に抛てられ

寶玦郎君泣路隅 寶玦^{けつ}の郎君 路隅に泣く

諜報長驅殊未覺 諜 長驅を報ずれども 殊に未だ覺えず

經書大去可勝誅 經 大去と書^しすも 誅するに勝う可けんや

世間果有桃源否 世間に果たして桃源有りや否や

千載無人更問途 千載 人の更に途を問うもの無し

劉克莊は陸游の詩に傾倒していたことがある。「晩節 初寮集、中年 務観の詩」(「前輩」卷三)。務観は陸游の字。しかし、「世間に果たして桃源有りや否や、千載 人の更に途を問うもの無し」、物情騒然とした時期に生きていた劉克莊にとって、「人間 隨所に桃源有り」という魅惑的だが甘い考えは、もはや幻影と化しつつあったのである。

ふたつは、第六節に後述するとおり、個人的な事象として陸游が道教の修業を実践していたからである。道教の目的のひとつは、一般に房中術に対する探究に端的に見られるように、現世的快樂を享受することである。⁽⁷⁾

第四節 陸詩に現れた「太平」の語義 その三 「心は太平」

師友彫零身白首

師友は彫零し 身は白首

杜門獨學就誰評

門を杜ざし 独り学び 誰に就きて評せられん

秋風棄扇知安命

秋風 扇を棄てて 命に安んじるを知り

小柱留燈悟養生

小柱^{ちゅう} 灯に留まりて 生を養うを悟る

踵息無聲酣午枕

踵息 声無く 午枕を酣しみ

舌根忘味美晨烹

舌根 味を忘れ 晨烹を美しとす

少年妄起功名念

少年 妄りに功名の念を起こし

豈信身閑心太平

豈に信ぜんや 身は閑かにして 心は太平なるを

この詩は、孝宗の乾道三年(一一六七)、四十三歳のとき、山陰で作られた「独学」(卷一 第一冊一二六頁)と題する作品である。陸游は前年、抗戦派の將軍・張浚の北伐を支持したため、興隆通判の職を解任されて郷里に引つ込

んでいた。問題の「太平」であるが、最後の一句「豈に信ぜんや 身は閑かにして 心は太平なるを」に対して、陸游自身が自注において「黄庭経」の「閑暇 事無く 心は太平」〔雲笈七籤〕卷十二所収「太上黄庭外景经」では、「行間無事・心太平」に作る）を引用しているとおり、この詩における「太平」は、道教的修業・悟り、すなわち内的世界の平和をいっているのであって、外的世界の平和を意味するのではない。陸游が「太平」という言葉を使う場合、外的世界の平和にかぎられないのである。なお、「踵息」は、『莊子』第六「大宗師」篇の「真人の息は踵を以てし、衆人の息は喉を以てす」にもとづき、一種の深呼吸による養生法をいうのに対して、「舌根 味を忘れ 晨烹を美しとす」というのは、野菜料理を中心とした食餌による養生法をいう。陸游の「雜感五首・其の三」（卷五十四 第六冊三一九一頁）に「肉食 老人を養う、古に是の説有りと雖も、身を修めて以て終わりを待てば、何ぞ饕餮に陥るに至らんや。晨烹 山蔬美く、午漱 石泉潔し。豈に七尺の軀に役せられ、此の膚寸の舌に事えんや」、また「雜賦十二首・其の一」（卷七十九 第八冊四二九三頁）に「地爐 夜熱し 麻蔕暖かく、瓦甌 晨烹 豆粥香ばし」などとうたわれているとおり、「晨烹」とは、おそらく早朝に摘み取った新鮮な野菜（「山蔬」）を使ってお粥を作ることであろう。すでに記したとおり、「独学」詩は四十三歳のときの作品。陸游は四十歳をこえたころから、食餌法（今風にいえばダイエットによる健康管理とでもいえようか）を始めており、多分、この年齢にいたって肉体的衰えを感じ始めたのであろうが、第四句「小炷 灯に留まりて 生を養うを悟る」、生命のエネルギーを少しずつ燃焼させることによって、長く生命を持続させると詠ぜられているとおり、「心は太平」は、道家的修養と深く関係しているといえる。

更に陸游は成都における寓室に「心太平菴」と名づけ、孝宗の淳熙四年（一一七七）、五十三歳、やはり官職を退き、成都で祠禄（官職を退いたものに対する一種の優遇措置で、道観を管理するという名目による俸禄）を受けていたときに、「心太平菴」（卷九 第二冊七一五頁）と題する作品さえ作っている。

天下本無事

天下 本と事無し

庸人擾之耳

庸人 之を擾する耳

胸中故湛然

胸中 故もと湛然たり

忿欲定誰使

忿欲 定めて誰かせ使むる

本心倘不失

本心 倘し失せずんば

外物真一蠹

外物 真に一蠹なるのみ

困窮何足道

困窮 何ぞ道うに足らん

持此端可死

此れを持って 端に死す可し

空齋夜方中

空齋 夜方に中ば

窗月淡如水

窓月 淡きこと水の如し

忽有清磬鳴

忽ち清磬の鳴る有り

老夫從定起

老夫 定從り起つ

最後の一句の「老夫」は作者自身のことであり、「定」および前句の「清磬」という語から考えて、陸游は心を静

めるべく、座禪をくむか何かをして瞑想していたのであろう。史双元氏は『宋詞与佛道思想』四九頁（今日中国出版

社 一九九二年・北京）において右の詩を取りあげ、「陸游自身も仏教徒の禪定のことを学んだことがある」と指摘

された。道教と仏教（禪宗）との間には、思想的・修道的に通じ合うものがあつたのである。この「心は太平」とい

う表現も、陸游は生涯にわたってうたい続けた。

無事自能心太平

無事 自ら能く心は太平なり

有爲終蔽性光明

有爲 終に性の光明なるを蔽う

皮膚脱盡見真理

皮膚 脱し尽くして 真理を見わし

梁肉掃空甘菜羹

梁肉 掃い空しくして 菜羹を甘しとす

處處浮家成野宿

處處 浮家して 野宿を成し

時時策蹇作山行

時時 策蹇して 山行を作す

平生常笑羊裘老

平生 常に笑う 羊裘老

史册猶存後世名

史冊に猶お後世の名を存するを

寧宗の嘉泰四年（一二〇四）、八十歳のとき、山陰で作られた「懐いを書す」（卷五十八 第六冊三三六〇頁）と題

する詩である。第三句は、陸游の「翼実之正言に寄す」詩の一句「道を学んで 皮膚脱落すと雖も」に対する「劍南

詩稿校注』（二卷 第一冊一〇二頁）の「注釈」によれば、『正法眼蔵』のなかにある葉山の言葉「皮膚 脱落し尽く

し、惟だ真実の在る有り」、あるいは『涅槃経』の「皮膚枝葉 悉く皆な脱落し、惟だ真実在り」などにもとづく表

現であり、よけいな贅肉を取り去ってしまったところに「真実」が現れ出るという意味である。最後の一聯の「羊裘

老」は、後漢の光武帝の同学・嚴光。彼は光武帝が皇帝の位についた後、姓名を変え、身を隠して世間に現れなかつ

たが、その後、羊の裘をきて沢中で魚釣りをしているところを発見され、光武帝に呼び出された人物である（『後漢

書』卷八十三「逸民伝」。逸民とは本来、名声に恬淡無欲、世間に知られることのない人物であるはず。にもかかわ

らずこのような嚴光が逸民として史書に名をとどめ後世に伝わっているのを、陸游は笑っているのである。彼は「隠

逸伝を読む」（卷四十 第五冊二五四一頁）と題する七言絶句において、「終南の処士 都門に入り、少室の山人 諫

垣に補せらる。畢竟 只だ千載の笑いに供するのみ、石は三品に封ぜられ 鶴は軒に乗る」と詠じているように、隠

者の名をかりて仕官する、中途半端な処世術にがまんならなかったらしい。「終南の処士」、「少室の山人」は、それ

ぞれ唐の盧藏用と李渤を指す。それに対して陸游自身は、「一竿 風月」で始まる「鵲橋仙」詞（『渭南文集』卷五

十)の後関において、「潮生じて權を理え、潮平らぎて纜を繋ぎ、潮落ちて浩歌して歸り去る。時人は錯ちて把つて巖光に比すも、我は自らは是れ無名の漁父」とうたっており、「心は太平」である己れこそ「無名の漁夫」、真の逸民である与自己主張しているのである。

萬事罷經營 万事 經營を罷め

悠然心太平 悠然として心は太平なり

甘餐隨日足 甘餐 日に隨いて足り

美睡等閑成 美睡 等閑に成る

處處佳風月 処処 風月 佳く

人人好弟兄 人人 弟兄 好し

神仙不須學 神仙 學ぶを須いず

券内有長生 券内に長生有り

寧宗の嘉定二年(一二〇九)、八十五歳、すなわち陸游最後の一年、山陰で作られた「適を書す」(巻八十三 第八冊四四九頁)と題する作品である。最後の一句の「券内」は、己れの本分の意。陸游の場合、己れの内的世界を充実させること意味するであろう。『莊子』第二十三「庚桑楚」篇に、「内に券する者は無名に行い、外に券する者は期費に志す」とあり、郭象は前半の文に對して、「券は分なり。夫れ分内に遊ぶ者は、行いは名に由らず」と解釈した。「券内に長生有り」の句は、第二句の「悠然として心は太平なり」に呼応するわけである。

以上、陸游の詩に現れた「太平」の諸相について、作品を通して一瞥してみた。要するに、陸游は外的(公的)には中国全土の「太平」を願いながら、己れの周辺世界の「半壁の太平」を謳歌する一方、内的(私的)には心の「太平」をうたい続けたのである。しかし、これはいわば陸游のおもての表情である。おもてがあれば必ずうらがある。

節を改めて考えてみることにする。

第五節 「心は太平」のもうひとつの意味

陸游が「心は太平」とうたうとき、ふたつの点に注意しておかなければならない。注意すべきひとつの点は、彼自身は政治的社会的に不満足な状態に置かれており、「心は太平」と心のなかを観想することによって、平衡を失いがちな心の均衡を保とうと努めていることである。つまり陸游は自分の願いと逆、官僚の中心世界からはじき出されたところで、初めて「心は太平」という境地に身を意識的に置こうとしたのである。その証拠に、第四節に引用した「独学」・「心太平菴」ふたつの詩が、官職を解任、あるいは退職の後の作品であることはすでに述べたが、詩にくらべて私的な性格をもつ詞において、「心は太平」という表現にかぎって、「太平」が二度も使われているのである（ただし詞牌である「太平時」は除外。もつともこの詞も心の太平をうたった作品である）。

「破陣子」(二首・其の二) 前関(『渭南文集』卷五十)

看破空花塵世

看破す 空花の塵世

放輕昨夢浮名

放輕す 昨夢の浮名

蠟屐登山真率飲

蠟屐 山に登りて 真率に飲み

筇杖穿林自在行

筇杖 林を穿ちて 自在に行く

身閑心太平

身は閑かにして 心は太平なり

「長相思」(五首・其の五) 前関(同前)

悟浮世

浮世を悟り

厭浮名

浮名に厭く

回視千鍾一髮輕

回視すれば 千鍾は一髮より輕し

従今心太平

今従り心は太平ならん

後者の「長相思」詞についていえば、淳熙十五年（一一八八）、六十四歳、嚴州での任期が満ち、故郷に帰っていったときの作であるとされ、また「破陣子」も正確な制作時期はわからないが、淳熙五年（一一七八）、五十五歳、蜀より帰郷して以後の作であるとされる。おそらく両詞とも官職を退いていたときの作品であろう。さて「破陣子」、「長相思」ともに俗世間（塵世）、「浮世」を「浮名」と悟って、「心は太平」とうたわれているけれども、陸游の心は実際には、「浮名」と「功名」の間で激しく揺れ動いている。その証拠は、ひとつは、「回視すれば 千鍾は一髮より輕し」の「千鍾」（多くの俸禄、高い官職の意）という言葉である。この「千鍾」は、もう一首の「破陣子」にも、「仕えて千鍾に至るは良に易やすけれども、年の七十を過ぎるは常に稀なり」とうたわれており、「年の七十を過ぎる」ことはできたが、「仕えて千鍾に至る」ことのなかった陸游は、実は氣になつて仕方がないのである。もうひとつは、「功名」である。陸游は「青衫 初めて入る 九重城」の句で始まる「訴衷情」詞（『渭南文集』卷五十）の後関に、次のようにうたっている。

時易失

時は失い易く

志難成

志は成り難し

鬢絲生

鬢糸生ず

平章風月

風月を平章し

彈壓江山

江山を彈壓するは

別是功名

別に是れ功名なり

「風月を平章し、江山を彈圧する」とは、詩を作り、絵を描くという意味であり、こういう風流な生活も「功名」である、といっているのである。陸游の「功名」に対する関心の深さを示すものといつてよい。少なくとも「心は太平」とうたいながら、陸游は悟りきっているわけではなかったと思われる。「長相思」の後関に次のようにうたわれている。

愛松聲

松聲を愛し

愛泉聲

泉聲を愛す

寫向孤桐誰解聽

孤桐に向かいて写せんとするも 誰か解く聴かん

空江秋月明

空江 秋月 明かなり

「孤桐」の「桐」は琴、これを伴奏にして詞をうたうのである。「写」は『詩経』「邶風」「泉水」篇最後の章の最後の一聯「駕して言に出でて遊び、以て我が憂いを写せん」をおそらくを意識している。この「写」に対して『毛伝』も『詩集伝』も、「除くなり」と解釈する。「誰か解く聴かん」、己れの心声を誰が聴き取ってくれるであろうか。陸游は自分を理解してくれる人を求めていたのである。「凌煙に画かれ、甘泉に上る、古自り功名は少年に属す。心を知るは惟だ杜鵑のみ」。これは、「長相思」の三番目の後関である。

注意しなければならないもうひとつの点は、「心太平菴」である。陸游の詩に「予れ十年間、兩たび斥罪に坐す。

擢髮 数うる莫しと雖も、而れども詩を首と為し、之を謂いて風月を嘲詠すと。既に山に還り、遂に風月を以てて小軒に名づけ、且つ絶句を作れり」(卷二十一 第三冊一六二二頁)と題する作品がある。この詩題の一文「兩たび斥罪に坐す」というのは、淳熙七年(一一八〇、五十六歳)、提拏江南西道常平茶塩公事の職を、また淳熙十六年(一一八九、六十五歳)、礼部郎中兼実録院檢討官の職を免職させられたことを指す。免職の理由は数えきれないほど多くあるが、第一のものは「風月を嘲詠」した廉であるといっているのである。そして面白いのは、このために陸游は自分の

住居を「風月軒」と名づけたことである。ここで思い出されるのが放翁という号である。『宋史』卷三百九十五「陸游伝」に次のように記述されている。「范成大の蜀に帥たるや、游は参議官と為る。文字を以て交わり、札法に拘らざれば、人は其の類放なるを譏る。因りて自ら放翁と号す」。たいへん有名な一文である。陸游には人から受けた譴責や非難に対して、依怙地になつて茶化するような性癖があつたと思われる。このようなことを考えると、陸游が己れの寓居を「心太平菴」と名づけたのは、彼自身は「自注」において「余れ黄庭の語を取りて寓する所の室に名づく」といつているけれども、何かためにするところがあつたからではないだろうか。これはわたしの単なる想像にすぎない。しかし、「心太平菴」詩の冒頭の一聯「天下 本と事無し、庸人 之を擾する耳」が、陸游と同姓である唐の陸象先（六六五—七三六）の言葉「天下 本と事無し、庸人 之を擾して煩わしきを為す耳^{（つゝ）}。弟（陸象先を指す引用者）其の源を澄まさば、何ぞ簡ならざるを憂えんや」（『新唐書』卷一百十六「陸象先伝」）によるものであり、単なる個人的な私的生活態度をいつたものではなくて、統治の要諦を述べた言葉であることから判断すれば、「心は太平」という言葉には、当時の和親派に対する批判を込めた陸游の挑発的な態度が反映されているのではあるまいか。「心太平菴」詩の第三第四のふたつの句「胸中 故^{もと}もと湛然たり、忿欲^{ふんよく} 定めて誰かせ使むる」は、ただ漠然と一般的に「誰かせしむ」と表現したものではないのではないか。

いずれにしても「心は太平」とうたう一方で、陸游の心にもときどき満たされない気持ちがあることがあつた。というよりこの節の冒頭に述べたとおり、心に満たされないものがあつたので、「心は太平」とうたつたというべきである。このことを最もはつきりと示すのは、「虚しく太平の民と作る」という表現である。この点について次に考えてみることにするが、その前に陸游と道教との関係について簡単にふれておきたい。

第六節 陸游と道教

嘉泰四年、一二〇四、八十歳のときの作「道室試筆六首・其四」（卷六十 第七冊三四六頁）に、「吾が家 道を学んで 今 四世（高祖の軫、曾祖の珪、祖父の佃、父の幸）、世よ佩ぶ 施真（施肩吾、陸軫の師である）の三住銘」と詠ぜられてるように、陸游にとつて道教はいわば家学であった。入谷仙介氏は、「此身合是詩人未―陸游の劍門体験の意義―」と題する論稿において、陸游の「丹芝行」を取りあげられたとき、次のようにコメントされた。「彼はついに目くるめく解放の歓喜の中に、成仙の秘薬、絶対的自由の象徴たる大丹と靈芝とを幻視するに至ったのである」（十七頁）。確かに、陸游の詩には「道室何何」と題した作品がかなりあり、自分の「道室」を所有していた陸游は、そこで道教の修業を実践していた。嘉泰元年、一二〇一、七十七歳のときの作「道室書事」（卷四十五 第五冊二七七四頁）の前半に

五十餘年讀道書 五十余年 道書を読む

老來所得定何如 老い來たりて 得る所は定めて何如

目光焰焰夜穿帳 目光 焰焰 夜 帳を穿ち

胎髮青青晨映梳 胎髮 青青 晨 梳に映ず

と詠じた後、後の二句に対して「自注」において、「二事 皆な実を紀す」と記した。「胎髮」はうぶ毛をいうが、ここでは頭髮を指し、それが「青青」つまりくろぐろとしているというのである。また陸游は仙薬を練っていた。開禧三年（一二〇七）、八十三歳のときの作「道室戲詠」（卷七十四 第八冊四〇七六頁）に、「薬を采り 何ぞ遠きを辞せん、丹を焼き 久しく未だ成らず」と詠んでいる。結局、丹薬は完成しなかったが、嘉泰元年、一二〇一、七十七

歳のときの作「金丹」(巻四十五 第五冊二七六九頁)では次のように詠じた。

子有金丹鍊即成 子に金丹有り 鍊れば即ち成る

人人各自具長生 人人 各自 長生を具す

施行要使俗仁壽 施行すれば 要らず俗をして仁壽なら使め

收斂猶能心太平 收斂して 猶お能く心は太平なり

劇飲似鯨身不倦 劇飲 鯨に似るも 身は倦まず

細書如蠅眼常明 細書 蠅の如くなるも 眼は常に明かなり

更餘一事君難學 更に一事を余す 君 學び難し

富貴眞同涕唾輕 富貴は眞に涕唾と同じく輕し

この詩にいう「金丹」は、孫悟空が食た仙薬ではなく、胎息など道教の修練法、いわゆる内丹を意味する。⁽¹⁾最後の一聯「更に一事を余す 君 學び難し、富貴は眞に涕唾と同じく輕し」は、道教の修業における最大の障害「富貴」に対する欲望を捨て去りさえすれば、「鍊れば即ち成る」、誰でも道教の修業をすることができ、「心は太平」の状態に到達することができるということを述べたのである。

このように陸游は道教と深くかかわっていた。だが、陸游の道教的修練や仙薬に対する関心を考えるとき、道教の目的のひとつである長生(不老)ということを忘れてはならない。陸游も長生を求めて修業したことはいうまでもない。しかしなぜ彼は長生を求めたのだろうか。「金丹」詩制作時と同じ嘉泰元年(一二〇一)、七十七歳のとき、「道室雜題」(巻四十六 第六冊二八四三頁)と題する四首連作の詩を作り、第三番目の作品において次のように詠じた。

山中有草名長生 山中 草有り 長生と名づく

丹砂可死金可成 丹砂 死す可くして 金成る可し

服之刀圭齒髮換 之れを刀圭にて服して 齒髮換れば

要看東封告太平 要らず東封して太平を告ぐるを看ん

第二句の「丹砂 死す可くして 金成る可し」は、「道室書事」(卷四十八 第六冊二九一二頁)に「丹砂 焼いて已に死し、芝草 種えて初めて生ず」と表現されているから、丹砂を焼いて質的に変化させることを「死」と表現したのであろう。大事なことは、陸游の仙薬あるいは道教に対する関心や目的が、長生して「東封」すなわち東岳・泰山を封じ、「太平」(中国全土の平和)を告げる儀式をみることであったということである。いやもし若返ることが可能ならば、陸游みずから武器を執って起ちあがることさえ夢想していたかもしれない。「道室述懷」(卷五十七 第六冊三三〇六・三三〇七頁)と題する詩に、「養心の功用は還嬰に在り」と詠ぜられているほどである。「還嬰」は若返りの意味にはかならない。長生が目的のひとつである道教に対する陸游の傾倒には、「太平」(中国全土の平和)を自分の目でみたいという切実な願望があった。

當時辛苦學長生 當時 辛苦して長生を学ぶは

準擬中原看太平 中原に太平を看んと準擬するなり

今日醉遊心已足 今日 酔いて遊び 心は已に足る

一瓢歸去隱青城 一瓢 歸り去り 青城に隠れん

「道友に贈る」(卷三十一 第四冊二〇八二頁)と題する五首連作の第三番目の作品、紹熙五年(一一九四)、七十歳のとき、山陰での作である。第四句の「青城」は青城山のことで、道家にいう十大洞天の第五番目の靈山。唐・李吉甫(七五八―八一四)『元和郡県図志』卷三十一「劍南道上」蜀州・青城県の項に引く『仙經』に、「此は是れ第五洞天なり」と記されており、成都から西北に向かつておおよそ六十キロメートルのところにある。陸游は淳熙元年

(一一七四) 十月五十歳のとき、成都から知事代理に任命されて榮州(成都の南南東およそ百四十キロメートルに位置する)に赴く道中、いったん青神(成都の南南西およそ九十五キロメートル)にまで行ったところで、北に向かつて道を取ってかえして青城に行き、そこで青城山に登り、山の頂上にある上清宮に宿泊したことがある。「上清宮に宿す」詩(巻六 第二冊四八三頁)。「道友に贈る」詩は山陰で作られた作品であるから、「一瓢 歸り去り 青城に隠れん」というのは、ただ借りていつたまでのことか、あるいは酔境のなかでそうしようというのであろう。いずれにしてもかつて「太平を看んと」して、「辛苦して長生を学」んだことがあると、陸游みずから述べているのである。なお蛇足ながら、范成大(一一二六—一一九三)の『呉船録』(巻上)にも、淳熙四年(一一七七)六月三日から六日まで、青城山に登った体験が記録されており、このとき陸游も同行し、「范舎人の永康青城道中の作に和す」詩(巻八 第二冊六四五頁)から「范舎人の朝に還るを送る」詩(巻八 第二冊六五一頁)までの作品はそのときの記録であるが、ここで陸游が道教に対していかにふかい関心を抱いていたか、范成大の作品と比較することによって再確認しておこう。次に引用するふたつの詩は、兩人が青城山にある上清宮に宿泊したときに作った作品である。まず范成大の「上清宮」(『范石湖集』巻十八)と題する詩。

歷井捫參興未闌 井を歴し 參を捫して 興未だ闌ならず

丹梯通處更躋攀 丹梯の通ずる處 更に躋攀す

冥濛蜀道一雲氣 冥濛たる蜀道 一雲氣

破碎岷山千髻鬢 破碎せる岷山 千髻鬢

但覺星辰垂地上 但だ星辰の地上に垂るるを覚え

不知風雨滿人間 知らず 風雨の人間に満つるを

蝸牛兩角猶如夢 蝸牛の兩角 猶お夢の如くなるに

更説紛紛觸與蠻 更に説く 紛紛たる觸と蛮と

次に陸游の「上清宮に宿す」。

永夜寥寥憩上清 永夜 寥寥として 上清に憩う

下聽萬壑度松聲 下に聴く 万壑に松を度る声

星辰頓覺去人近 星辰 頓に覺ゆ 人を去ること近きを

風雨何曾敗月明 風雨 何ぞ曾て月明を敗らん

早歲文辭妨至道 早歲 文辭 至道を妨げ

中年憂患博虛名 中年 憂患 虚名を博くす

一菴儼許西峯住 一菴 儼し西峰に住むを許さば

常就巢僊問養生 常に巢僊に就きて養生を問はん

范成大が地上を遠く見おろす別天地ともいふべき上清宮において感じたのは、人の世の争いのあほらしさ、「蝸牛の両角 猶お夢の如くなるに、更に説く 紛紛たる觸と蛮と」。「莊子」第二十五「則陽」篇にもとづくものであることは言うまでもない。政治を担当する知識人として、いい意味で常識的な反応である。それに対して陸游の関心は、

「一菴 儼し西峰に住むを許さば、常に巢僊に就きて養生を問はん」、やはり「養生」つまり長生不死のことであつた。なお、「巢僊」は「自注」によれば、この山中に巢居していた上官道人なる人物であり、『老学庵筆記』（卷二）

に次のように記述されている。「青城山の上官道人は、北人なり。巢居し、松麩を食ひ、年九十なり。人に之に謁する者有れば、但だ粲然として一笑するのみ。問うを請う所有れば、則ち聾を病むと託言し、一語も肯て答えず。予れ嘗て之を丈人觀の道院に見みゆ。忽ち自ら養生を語りて曰わく、国家の為に太平と長生不死を致すは、皆な常人の能くする所に非ず。然れども且く当に国を守りて乱れざらしめ、以つて奇才の出づるを待ち、生を衛りて夭ならざらし

め、以つて異人の至るを須^まつべし。乱れず天ならざるは、皆な異術を待たず、惟だ謹むのみ、と。予れ大いに喜び、従いて之を叩けば、則ち已に復た職と言えり。この話が實際にあつたかどうかは問うまい。大事なことは、陸游がこれほどまでに「太平」と長生不死について真剣であつたということである。

陸游と道教との関係は以上にして、本題に戻る。

第七節 虚しく「太平」の民となる

陸游の紹熙二年、一一九一、六十七歳のときの作「山居」(卷三十二 第四冊一六六一頁)に次のように詠ぜられて
いる。

平生杜宇最相知	平生 杜宇 最も相知
遣我巢山一段奇	我れに遣 ^{おく} る 巢山 一段の奇
茶磴細香供隱几	茶磴 ^が の細香 隠几に供し
松風幽韻入哦詩	松風の幽韻 哦詩に入る
溪邊拂石同兒釣	溪辺 石を払いて 兒と ^{とも} に釣り
竹下開軒喚客棋	竹下 軒を開いて 客を喚んで棋す
幾許放翁新事業	幾 ^{いくばく} 許の放翁の新事業
不教虚過太平時	虚しく太平の時を過 ^し ごさ教めず

漁父が隱者を象徵することがあるように、また圉碁が仙人の娛樂であつたりするように、右の詩は、魚釣りや圉碁などのいわば道家的生活の喜びを詠じたものであり、魚釣りや圉碁を称して「放翁の新事業」と呼び、最後に「虚し

く太平の時を過こさ教めず」と結んだ。しかし、前節に述べたような陸游と道教との深刻な関係を考えると、この詩に対してシニカルな響きと微妙な陰影を感じざるを得ない。陸游は「虚しく太平の時を過こさ教めず」と詠じたけれども、この心の深層にはこのまま「虚しく太平の時を過こ」していくのではないかという、おその感情とにがい気持ち動いていたのではあるまいか。むしろ「虚しく太平の時を過こ」していると不安に感じていたので、しいて「虚しく太平の時を過こさ教めず」といい放ったというべきではないか。次に引用する詩には、はっきりと己れの心が吐露されている。

欲去浮華累

浮華の累を去らんと欲し

先觀老病身

先ず老病の身を觀る

濁醪何負汝

濁醪 何ぞ汝に負かん

淡飯最宜人

淡飯 最も人に宜し

意氣隨年往

意氣 年往に隨い

工夫媿日新

工夫 日新に媿はず

祇將閑送老

祇だ將に閑かに老を送り

虛作太平民

虚しく太平の民と作ならんとす

これは、寧宗の開禧元年（一二〇五）、八十一歳のとき、山陰において作られた「觀身」（卷六十二 第七冊三五四三・三五四四頁）と題する詩である。「觀身」といえば、『老子』（第五十四章）の次の一節、「身を以って身を觀、家を以って家を觀、郷を以って郷を觀、国を以って国を觀、天下を以って天下を觀る」である。この文は「儒家の『修身、齊家、治国、平天下』（『礼記』大学篇）の主張を容易に想起させる」（福永光司『老子 下』中国古典選11 朝日新聞社）。第六句の「日新」も「大学篇」の「湯の盤の銘に曰く、苟に日に新たにせば、日に新たに、又た日に

新たななり」にもとづくものであり、第五句の「年往」は、『楚辞・九弁』の「年は洋洋として以って日び往き、老は嚮廊として処無し」にもとづくものであるから、第五・六句は、むなしく年を重ね老を増してゆくにつれ、「日新」の「工夫」（努力）をおこたっている己れを恥ずかしく思うというような意味になる。ところで『老子』の「觀身」が最終的にたどり着くのは「天下を看る」、やはり福永氏の訳語を拝借すれば「天下の治まりぐあいを觀る」である。ところが陸游の場合、彼が「觀身」からたどり着いたものは、最後の一聯「祇だ將に閑かに老を送り、虚しく太平の民と作らんとす」である。陸游は正直に己れは虚しく「太平」の民として生きていると告白しているのである。

陸游が執拗にくり返して何度も「太平を楽しむ」と表明するとき、それは確かに実感であった。もう一度、村上哲見氏の見解を引用すれば、「陸游の郷里における生活を詠じた詩を読んでいて、しみじみと心温まる思いを感じるのは、そこに村人たちとの和やかな交情が漂っているからである」⁽¹²⁾。しかし、己れの内面と静かに向かいあうとき、満たされない気持ちがあふと心をかすめることがあり、それが「虚しく太平の民と作らんとす」という弱気な表現になって現れたのである。

このようにみでくると、紹熙三年、一一九二、六十八歳のときの「夢に数客と劇飲するに、或ひと詩を賦せんことを請う。予れ已に大いに酔えば、筆を縦にして一絶を書す。覚めて之を録せり」（卷二十六 第四冊一八五三頁）と題する作

高談雄辯憑陵酒

高談 雄弁 憑陵の酒

豪竹哀絲蹴蹋春

豪竹 哀糸 蹴蹋しゅうたつの春

占斷名園排日醉

名園を占斷して 日を排して酔い

不教虚作太平人

虚しく太平の人と作らし教めず

の最後の一句「虚しく太平の人と作ら教めず」に対しても、表現の深層にあるものを詮索してみたくなるのは自然な

ことである。「名園を占断して 日を排して酔う」生活を称して「太平の人」といったけれども、先ほどの「山居」詩と同様に、陸游の本心はむなしく太平の人となっているということではあるまいか。愛国詩人・陸游には金の国との国境線まで出かけた経験をもちながら、結局は中原の「太平」という願いを自分の力で実現させることができなかったにがい記憶がいつも脳裏にあったと、わたしは思うのである。「太平」という言葉は使われていないが、慶元二年（一一九六）、七十二歳のとき、山陰で作られた「九月二十八日、五鼓に起きて坐し、架上の書を抽いて、九域志を得、茫然として感有り」（卷三十五 第五冊二二八二頁）と題する詩において次のように詠じている。

一事無成老已成 一事 成る無く 老いは已に成れり

不堪歲月又崢嶸 堪えず 歲月の又た崢嶸たるに

愁生新雁寒初下 愁い生じて 新雁 寒きに初めて下り

睡起殘燈曉尚明 睡より起されば 殘灯 曉に尚お明かなり

天地何由容醜虜 天地 何に由りてか醜虜を容るる

功名正恐屬書生 功名 正に恐らく書生に属せん

行年七十初心在 行年 七十 初心在り

偶展輿圖派自傾 偶たま輿図を展いて 涙 自ら傾く

詩題の「九域志」は、正式には『元豊九域志』といい、国家の事業として北宋の元豊三年（一〇八〇）閏九月に完成した中国全国地図であり（『四庫全書總目提要』卷六十八「史部二十四」「地理類一」、第八句の「輿図」はこれを指す。第七句の「初心」とはいうまでもなく、「醜虜」（金の国）を中原から追い出して中国を統一するという陸游の初志である。七十歳になっても「初心は在り」、「功名 正に恐らく書生（作者の自称）に属せん」と詠じているけれども、しかし、この志は「一事」として完成することなく、むなしく「崢嶸」として年月を重ねていると嘆きなが

ら、陸游はふとしたことから『九域志』を書架から取り出してそれを開き、「泫然^{げん}」としてハラハラと涙を流しているのである。第一節に引用した「新夏感事」の最後の一句に、「小儒 唯だ涕の縦横たる有り」と、また第二節に引用した「諸葛丞相の廟に謁す」の第十句に、「再拝して俎を奠めれば衰涙は進る」と詠ぜられていたように、陸游は感きわまると、よく涙を流す人だが、右の詩の題に「九月二十八日五鼓」と月日のみならず時刻（五鼓は五更に同じ）まで記しているのは、おそらくこのときの思いをけつして忘れまいとする、つよい気持ちの現れであろう。

第八節 「太平」の幸民と「太平」に老ゆ

「虚しく太平の民と作る」に関連してもうひとつ触れておかなければならないのは、「幸民」という言葉である。陸游は乾道二年（一一六六）、四十二歳の冬から乾道三年の春の間にかけて、やはり「抗戦派の將軍・張浚の北伐を支持したため、興隆通判の職を解任されて郷里に引っ込んでいた」（本論一七・一八頁）とき、すでにこの拙論（二十頁）に一部引用した「龔実之正言に寄す」（巻一 第二冊一〇二頁）と題する詩を作り、次のように詠じた。

臺省諸公歲歲新	台省の諸公	歳歳	新たなるも
平生敬慕獨斯人	平生	敬慕するは	独り斯の人のみ
山林不恨音塵遠	山林	恨まず	音塵の遠きを
夢寐時容笑語親	夢寐	時に容る	笑語の親しむを
學道皮膚雖脫落	道を学んで	皮膚は脱落と雖も	
憂時肝膽尚輪困	時を憂いて	肝膽は尚お輪困 ^{えん} たり	
至和嘉祐須公了	至和 嘉祐	公の了 ^な すを須 ^な ち	

乞向升平作幸民 乞うらくは升平に向かいて幸民と作らんことを

詩題の龔実之は、名を茂良といい、実之は字。このとき、右正言の職にあり、彼も張浚に認められた硬骨の人であった。⁽¹³⁾最後の一聯は、仁宗皇帝の「至和」や「嘉祐」時代の「升平」「太平」に同じ)の再現の完了は、あなたにお任せして、己れは民間の「幸民」に甘んじようということであるが、この「乞うらくは升平に向かいて幸民と作らんことを」はおそらく、黄庭堅(一〇四五—一一〇五)の「子瞻の韻に同じて、趙伯充団練に和す」(『豫章黃先生文集』卷九)と題する詩の最後の一句「升平に付与し 幸民と作らん」の模倣である。陸游は江西詩派に属する曾幾(二〇八四—一一六六)を彼の詩学の師匠にしていたので、黄庭堅の詩は熟知していたと思われるからである。小川環樹『陸游 中国詩文選20』(筑摩書房)一八頁以下参照。ところで「幸民」とは、そもそもいかなる意味であろうか。『春秋左氏伝』卷十一「宣公十六年」に次のような一文がある。

善人 上に在れば、則ち国に幸民無し。諺に曰わく、民の多幸は、国の不幸なり、と。是れ善人無きの謂いなり。

「幸民」とは本来、明らかに否定的なニュアンスをもった言葉である。したがって「幸民と作」ること、これはけっしてこのときの陸游の本心ではあり得なかった。このことは、その後の彼の経歴が何よりも雄弁に語っている。このときの「幸民」という表現は、たわむれの発言であろう。陸游の「幸民」の句は、黄庭堅の模倣であるところに、すでに気楽な表現であると想像されるが、ちなみに黄庭堅の先程引用した句の前の一句は、「醉郷は乃ち是れ身を安んずる処」であり、「幸民」は酒の世界の中でのことであつた。

四十二歳ごろ、心とは裏腹に「幸民」と詠じた陸游は、寧宗の嘉泰二年(一二〇二)、七十八歳のとき、「湖隄の上を散歩するに、時に方に湖を浚^ほえは、水面 稍や渺瀰なり」(卷五十 第六冊三〇〇頁)と題する詩において次のように詠じた。

老覺人間萬事輕 老いて覺ゆ 人間 万事 輕きを

不妨閑處得閑行 妨げず 閑處に閑行するを得たるを

西山鳥沒暮雲合 西山 鳥没して 暮雲 合し

南浦隄平春水生 南浦 隄平かにして 春水 生ず

孤操不渝無鶴怨 孤操 渝らざれば 鶴怨無く

淡交耐久有鷗盟 淡交 久しきに耐えて 鷗盟有り

先民幸處吾能勝 先民の幸いなる處 吾れ能く勝る

生長兵間老太平 兵間に生長し 太平に老ゆればなり

詩題の湖は、山陰にある鏡（鑑）湖のこと。陸游は鏡湖の三山に居を構えていた。彼の「幽棲二首・其の二」（卷三十二 第四冊二二五頁）の「自注」に、「乾道丙戌（一一六二、四十二歳）、始めて鏡湖の三山に卜居す」とあり、三山は山陰の西九里、鏡湖のなかにあった。陸游「春日二首・其の二」詩（卷二 第一冊二二五頁）の「注釈」に引く『嘉泰會稽志』および『嘉慶山陰縣志』。陸游自身は「鏡湖の南に在り」と述べている。「夜に小南門城の上に登る」詩の「自注」（卷八 第二冊六五九頁）。ところで陸游は最後の一聯「先民の幸いなる處 吾れ能く勝る、兵間に生長し 太平に老ゆればなり」に対して、「自注」において次のように説明した。「邵堯夫（堯夫は邵雍の字）自ら謂えらく、太平に生まれ、太平に老い、太平の幸民為り、と。彼れ豈に幸いを知らんや。予れの若きは乱離に生まれて、乃ち太平に老ゆ。真に幸いと謂う可し」。「自注」に引用されている邵堯夫の言葉は、邵堯夫の辞世の歌とされる「病亟吟」（『伊川擊壤集』卷二十）中の句である。ただし現在伝わっている「病亟吟」には「太平の幸民」という表現はないのみならず、「幸いに太平の日に逢う」（『四事吟』『伊川擊壤集』卷十三）などという表現はあっても、邵堯夫は一度も「幸民」という言葉を使ったことはない。邵堯夫が「幸民」であるというのは、陸游の彼に対する個人的

な見解であつて、陸游は邵堯夫を勝手に己れの次元にまで引き下げて争い、そして勝ち誇っているのである。この詩にみられるとおり、陸游はおそらく他人と競争することの好きな性格の人であつた。山陰という土地柄と何か関係でもあるのだろうか。

さて右の陸游の詩における「太平」である。この「太平」はすでに略述したとおり、「半壁の太平」である。少し細かくみてみよう。まず詩の前半四句は、「閑居」・「閑行」といい、「暮雲」・「春水」というのは、隠退後の満ちたりた心静かな日常のひとつままと、周辺の風景を描いた。次に「孤操」の一聯。「鶴怨」は、南齊・孔稚珪（四四七—五〇二）の「北山移文」（『文選』卷四十三）の一聯「蕙帳空しくして夜鶴怨み、山人去りて曉猿驚く」にもとづき、自分は「山人」（周顒を指す）とちがひ、節操を曲げず、世間に出ることはなかった、という意味であり、「鷗盟」は、『列子』第二「黄帝」篇にある話、「海上の人に瀟鳥を好む者有り。毎旦、海上に之き、瀟鳥に従つて遊ぶ。瀟鳥の至る者、百もて数うれども止まず。其の父曰く、吾れ聞く、瀟鳥皆な汝に従つて遊ぶと。汝、取り来たれ。吾れ之を玩ばん」と。明日、海上に之けば、瀟鳥は舞いて下らざるなり」にもとづき、陸游は自分はたくらみのない、無心の心をいつまでも保持している、といっているのである。すなわち「自注」にいうところの「幸民」の実質である。しかし「自注」において「幸民」という言葉を使ったこのときの陸游の心を推測すれば、それは、彼の心には『春秋左氏伝』を反用して、「善人 上に無ければ、則ち国に幸民有り」、自分が「幸民」であるのは、上に「善人」がいらないからであるという批判の気持ちで働いていたのではあるまいか。いうまでもなく「善人」とは、抗戦派の官僚を意味し、「幸民」という言葉には和親派に対する批判の感情が込められていたと、わたしは考えるのである。己れを称して「幸民」と呼んだけれども、やはりそれは陸游の本心では必ずしもなかった。

「湖隄の上を散歩するに、時に方に湖を浚えば、水面 稍や渺瀰なり」詩に関して、もうひとつ指摘しておかなければならないことがある。それは最後の一句「太平に老ゆ」である。陸游の作品には、もう一例「太平に老ゆ」とい

う表現がある。

拖得烏藤到處行

烏藤を拖き得て 到る処に行く

看山看水眼猶明

山を看 水を見て 眼は猶お明かなり

但期少健遊潼華

但だ期す 少健にして 潼華に遊ばんことを

豈必長生似老彭

豈に必ずしも長生して老彭に似んや

一綱青鞵吾事了

一綱の青鞵 吾が事 了り

半甌綠酒萬緣輕

半甌の綠酒 万縁 輕し

安知不作希夷叟

安んぞ知らん 希夷叟作らずして

生長兵間老太平

兵間に生長し 太平に老ゆるを

これは、寧宗の嘉泰元年（一二〇二）、七十七歳のとき作られた「縦筆」と題する四首連作の第三番目の作品（卷四十八 第六冊二八九〇頁）である。第七句の「希夷叟」は、北宋の逸民・陳搏のこと。彼は自ら言うとおろ、「五代の離乱」を経た後、宋の「天下太平」の時世に遭遇した人物である。その彼に己れの生涯をダブらせた陸游は、自分も陳搏と同様に「兵間に生長し 太平に老ゆ」と表明しているわけであるが、この最後の一聯を詠じたとき、陸游の心情には複雑なものがあつたのではないだろうか。ふたつの点から述べてみよう。

ひとつは、「安んぞ知らん」という表現である。「安んぞ知らん」が「思案ノ外ナルライフ辞」（釈頭常『詩家推敲』卷之下）である以上、「希夷叟作らずして、兵間に生長し太平に老ゆ」るのは、陸游自ら求めて得たものではないということになる。自ら求めて得たものではないとは、すなわち「幸民」の意味にはかならない。

ふたつは、本論の主題である「太平」である。同じく「太平」であっても、陳搏の場合は「全中国の太平」であるのに対して、陸游の場合は「半壁の太平」であって、同じ次元で論じることとはできない。陸游は質の異なる「太平」

を、邵堯夫に対するときと同じように、無理やり同次元で論じようとしているのである。

「太平に老ゆ」という表現に以上のような心情をみてとることができるが、しかし「太平に老ゆ」という表現は、陸游にとってはたいへん重い意味が託されている。それは、「太平に老ゆ」という表現は、ある種のとりすました表現になってはいえるけれども、真の「太平」（中国全土の平和）世界に生きることをお願いしながら、現実には半分の「太平」に生きるにすぎなかった陸游が、己れのこの世界における存在意義を託した、いわば自己の存在証明のような表現であると思われるからである。つまりわたしはこの「太平に老ゆ」という表現に、陸游の邵堯夫や希夷叟に対するむき出しの闘争心と同時に、哀しい心の動きやシニカルな響きをも読むのである。邵雍と陳搏は、ともかく自ら求めて隠者になった人であった。それに対して陸游の場合は「思案ノ外」のことであった。

ここで参考までに陸游の詩における「太平」の数量を、年齢の推移によって表にしてみると、表（１）のとおりである。

表（１）

年齢	使用数	年齢	使用数
30代	2	60代	21
40代	2	70代	41
50代	14	80代	25

表（２）

年齢	全	象	半	心	他
30	2	0	0	0	0
40	0	1	0	1	0
50	6	0	3	3	2
60	4	4	12	0	1
70	9	2	28	2	0
80	5	1	15	4	0
計	25	8	58	10	3

陸游は八十五歳でなくなっているから、単純に計算すれば80代の25は50という数字になり、10年ごとの詩数を考慮

に入れなければ、年齢に正比例して「太平」を詠じる回数が多くなっていることがわかる。この現象は半壁の「太平」を楽しむ一方、客観的に中国全土の「太平」実現の可能性が低くなるにつれて、主観的な「太平」願望の度合いが高くなっていることを意味するのではないだろうか。

次に表(1)を内容別にして作り直すと、表(2)のようになる。「金」は全中国、「象」は気象、「半」は半壁、「心」は「心太平」、「他」はその他。この表(2)をみれば、半壁の「太平」が圧倒的に多いこと、また60代以後に著しいことがわかる。これは、客観的にはどうであろうとも、陸游の心の中ではこの世の中は「太平」であり、己れはその「太平」に生を十分に享受した人間であると言いつつ聞かせようとしたことの現れであるといえるのではないだろうか。先程いった自己の存在証明というのは、このような意味である。

これを要するに、陸游が己れを称して「幸民」といい、「太平に老ゆ」といったとき、彼の心の中には農村での生活をたのしみ喜ぶ気持ちとともに、その反面で「虚しく太平の民と作る」という哀しみの感情もわだかまっていたのではないかと、わたしは思うのである。

結 語

「ロバの背の詩人」、これは小川環樹博士が陸游を評して象徴的に述べられた言葉である。⁽¹⁶⁾「ロバの背の詩人」から「太平の幸民」まで、陸游は自己確認つまり己れはそもそも何者なのかという自問に対する自答、現代風にいえば自己のアイデンティティーを、生涯かけて探し求めていた人であるとわたしは考える。これはもちろんあくまでも彼の人生における一面、趙翼の言葉を用いれば一万首中の「一意」⁽¹⁶⁾のひとつにすぎないことは言うまでもない。しかしそれはまた、けっして無視し去ることのできない「一意」である。

注 釈

- (1) 『大谷女子大学紀要 第30号第2輯』所収 一九九六年三月。
- (2) 一海知義注『陸游』四頁(岩波書店 昭和三十七年七月)。
- (3) 入谷仙介『夔州における陸游』参照(『中国詩人論 岡村繁教授退官記念論集』所収 一九八六年十月)。
- (4) 朱東潤『陸游伝』八五頁 上海古籍出版社 一九六〇年三月)。
- (5) 小川環樹 山本和義『蘇東坡詩集 第二冊』五〇六頁(筑摩書房 昭和五十九年五月)。
- (6) 『陸游』一五二頁(集英社 昭和五十八年)。
- (7) 史双元氏は『宋詞与佛道思想』(四九頁)において「根拠陸游詞推斷、陸游似乎与某道姑交情很深」といわれ、その証拠として「一叢花」詞(仙姝天上自無双)と「秋波媚」詞(曾散天花蕊珠宮)を指摘された。ここに「秋波媚」を記すと、次のような作品である。「曾散天花蕊珠宮 一念墮塵中 鉛華洗尽 珠璣不御 道風仙骨 東遊我醉騎鯨去 君駕素鸞從垂虹看月 天台采藥 更与誰同」。
- (8) 夏承禪氏は陸游の詞を称して詩の余事といわれた。夏承禪 吳熊和 箋注『放翁詞編年箋注(代序)』二頁(上海古籍出版社 一九八一年六月)。ただし陸游は、同時の辛棄疾のような高い調子ではないが、詞において憂國憂民の感情を歌うことがないわけではない。
- (9) 『放翁詞編年箋注』一一四頁。
- (10) 『島根大学法文学部紀要 文学編2』所収。
- (11) 『宋詞与佛道思想』七十頁参照。
- (12) 『陸游』一五九頁。
- (13) 『宋史』卷三百八十五「張浚伝」。
- (14) 『宋史』卷四百五十七「隱逸上」。
- (15) 『詩の風景・ロバの背の詩人』(『陸游』中国詩文選20 筑摩書房 昭和四十九年)。
- (16) 『甌北詩話』卷六「陸放翁詩」。

補 足

ここに「太平」の用例すべてを掲げておく。

- 1、已卜余年見太平（「新夏感事」卷一 第一冊 二二頁）
- 2、從今父子見太平（「喜小兒輩到行在」卷一 第一冊 四九頁）
- 3、豈信身閑心太平（「独学」卷一 第一冊 一一六頁）
- 4、不信太平元有象（「馬上」卷三 第一冊 二二六頁）
- 5、淚痕空对太平花（「太平花」卷五 第一冊 四四六頁）
- 6、李公太平官京師（「龍眠画馬」卷五 第一冊 四五二頁）
- 7、太平海内多豐年（「龍洞」卷六 第二冊 五〇七頁）
- 8、太平時得自由身（「对酒」卷六 第二冊 五三三頁）
- 9、從今身是太平人（「中夜聞大雷雨」卷七 第二冊 五五二頁）
- 10、猶擬中原看太平（「城東馬上作二首・其二」卷八 第二冊 六三五頁）
- 11、投老深思看太平（「登劍南西川門感懷」卷八 第二冊 六四四頁）
- 12、長作閑人樂太平（「訪昭覺老」卷八 第二冊 六六七頁）
- 13、太平極嘉祐（「玉局觀拝東坡先生海外画像」卷九 第二冊 七二三頁）
- 14、詩題（「心太平菴」卷九 第二冊 七一五頁）
- 15、學道逍遙心太平（「晚起二首・其二」卷九 第二冊 七一八頁）
- 16、貞觀太平如更賭（「雨夜不寐觀壁間所張魏鄭公砥柱銘」卷十一 第二冊 八七二頁）
- 17、身遠且令心太平（「北窓哦詩因賦二首・其二」卷十一 第二冊 九〇四頁）
- 18、買酒漁村看太平（「乍晴風日已和泛舟至扶桑 徘徊西村久之」卷十四 第三冊 一一二三頁）
- 19、太平氣象君知否（「雜興三首・其二」卷十七 第三冊 一三三三頁）
- 20、知是中原今太平（「焉耆行二首・其二」卷十八 第三冊 一四〇五頁）
- 21、薄命枉教生太平（「歲晚書懷」卷十八 第三冊 一四二二頁）
- 22、賸欲銜盃樂太平（「還舍」卷十八 第三冊 一四三七頁）

- 23、猶幸為民死太平〔笛中偶得去年二月都下數詩〕卷十九 第三冊 一五二頁
- 24、太平豈無象〔逐客至大浪灘上〕卷二十 第三冊 一五二七頁
- 25、剩買官醪樂太平〔夜還驛舍〕卷二十 第三冊 一五五五頁
- 26、不死還能見太平〔四鼓出嘉會門赴南郊齋宮〕卷二十 第三冊 一五六六頁
- 27、剩喜東歸樂太平〔秋晚弊廬小葺一室過冬欣然有作〕卷二十一 第三冊 一六二八頁
- 29、山沢何妨老太平〔冬晚山房書事〕卷二十一 第三冊 一六二九頁
- 28、勉為明時頌太平〔有感〕卷二十二 第四冊 一六五三頁
- 30、不教虛過太平時〔山居〕卷二十二 第四冊 一六六一頁
- 31、剩伴鄉鄰醉太平〔春晴出遊〕卷二十四 第四冊 一七四三頁
- 32、太平有象人人醉〔入城至郡圃及諸家園亭遊人甚盛〕卷二十四 第四冊 一七四八頁
- 33、不死令君看太平〔夜坐水次〕卷二十四 第四冊 一七六六頁
- 34、種藥南山待太平〔老将二首·其二〕卷二十五 第四冊 一七八〇頁
- 35、太平民樂無愁歎〔題老學菴壁〕卷二十六 第四冊 一八三五頁
- 36、不教虛作太平人〔夢與數客劇飲〔以下省略〕〕卷二十六 第四冊 一八五三頁
- 37、常遣山林見太平〔送佖昭光老赴徑山〕卷二十七 第四冊 一八八一頁
- 38、太平氣象吾能說〔春社四首·其二〕卷二十七 第四冊 一八八三頁
- 39、太平處處是優場〔同右·其四〕卷二十七 第四冊 一八八四頁
- 40、枉是儒冠遇太平〔春夜謠書〕卷二十九 第四冊 一九九一頁
- 41、太平有象無人識〔春晚村居〕卷二十九 第四冊 二〇〇三頁
- 42、太平處處熏風好〔夏日〕卷三十 第四冊 二〇二五頁
- 43、準擬中原看太平〔贈道友四首·其三〕卷三十一 第四冊 二〇八二頁
- 44、冷飯黃齋傲太平〔夜坐灯滅戲作〕卷三十一 第四冊 二〇八九頁
- 45、天作太平基〔孝宗皇帝挽詞〕卷三十一 第四冊 二〇九四頁
- 46、儼築太平基〔歲暮感懷以余年諒無幾休日愴已迫為韻十首·其九〕卷三十一 第四冊 二二二三頁

- 47、寿我太平脈〔同右・其十〕卷三十一 第四冊 二二一四頁)
- 48、所願樂太平〔農家歎〕卷三十一 第四冊 二二四〇頁)
- 49、始知身是太平人〔初夏〕卷三十二 第四冊 二二四五頁)
- 50、鼓缶酣歌樂太平〔野堂四首・其四〕卷三十三 第四冊 二二七五頁)
- 51、剩与鄰翁醉太平〔題齋壁〕卷三十三 第四冊 二一八五頁)
- 52、太平事業方施設〔記九月三十日夜半夢〕卷三十三 第四冊 二一九二頁)
- 53、剩与兒童樂太平〔北園雜詠十首・其五〕卷三十五 第五冊 二二八九頁)
- 54、太平事業人皆見〔醉中信筆作四絕句既成懽觀者不知野人本心也復作一絕五首・其後〕卷三十五 第五冊 二二九七頁)
- 55、至今稱太平〔病中作二首・其二〕卷三十五 第五冊 二三〇五頁)
- 56、耕桑樂太平〔晚步〕卷三十五 第五冊 二三一頁)
- 57、解与明時說太平〔春行〕卷三十五 第五冊 二三一四頁)
- 58、聊用閑身答太平〔閑身〕卷三十六 第五冊 二三二四頁)
- 59、中原失太平〔北望〕卷三十六 第五冊 二三五九頁)
- 60、太平阡陌樂閑身〔夏日五首・其五〕卷三十七 第五冊 二三七七頁)
- 61、留向人間看太平〔書喜〕卷三十七 第五冊 二三八三頁)
- 62、虛教遇太平〔戲作貧詩二首・其二〕卷三十八 第五冊 二四七一)
- 63、日与鄉閭樂太平〔致仕後歲事有望欣然賦詩〕卷三十九 第五冊 二五〇九頁)
- 64、且与心君致太平〔雜興四首・其一〕卷四十 第五冊 二五三三頁)
- 65、太平一老醉騰騰〔一老〕卷四十 第五冊 二五五二頁)
- 66、太平端有象〔幽居初夏四首・其三〕卷四十三 第五冊 二六七五頁)
- 67、七十年來樂太平〔風雨〕卷四十四 第五冊 二七四四頁)
- 68、何妨醉太平〔山家五首・其三〕卷四十五 第五冊 二七五六頁)
- 69、收斂猶能心太平〔金丹〕卷四十五 第五冊 二七六九頁)
- 70、太平翁翁十九年〔追感往時五首・其一〕卷四十五 第五冊 二七七九頁)

- 71、与汝樂太平〔三月二十日兒輩出謁孤坐北窓〕卷四十五 第五冊 二七九七頁
- 72、長歌樂太平〔晨雨〕卷四十六 第六冊 二八〇九頁
- 73、要看東封告太平〔道室雜題四首・其三〕卷四十六 第六冊 二八四三頁
- 74、生長兵間老太平〔縱筆四首・其三〕卷四十八 第六冊 二八九〇頁
- 75、豐歲何妨樂太平〔園中作二首・其二〕卷四十八 第六冊 二九一六頁
- 76、生長兵間老太平〔散步湖隄上時方潯湖水面稍渺濶矣〕卷五十 第六冊 三〇〇〇頁
- 77、問今何人致太平〔韓太傅生日〕卷五十二 第六冊 三〇七四頁
- 78、老眼重來看太平〔紹興癸亥余以進士來臨安（以下省略）〕卷五十三 第六冊 三二二二頁
- 79、乞得余年樂太平〔上章納祿恩畀外祠遂以五月初東歸五首・其五〕卷五十三 第六冊 三二五五頁
- 80、皦皦太平民〔題齋壁〕卷五十五 第六冊 三二五三頁
- 81、麥飯香中喜太平〔野步至近村〕卷五十七 第六冊 三三一九頁
- 82、無事自能心太平〔書懷〕卷五十八 第六冊 三三六〇頁
- 83、耄年猶作太平民〔野興四首・其三〕卷五十八 第六冊 三三八二頁
- 84、太平元有象〔雪後〕卷六十 第七冊 三四七二頁
- 85、虛作太平民〔親身〕卷六十二 第七冊 三五四四頁
- 86、惆悵無人說太平〔夢中作二首・其二〕卷六十四 第七冊 三六三三頁
- 87、遇亂能全見太平〔自嘲〕卷六十五 第七冊 三六六二頁
- 88、北陌東阡醉太平〔夜思〕卷六十五 第七冊 三六六九頁
- 89、白首書生樂太平〔春遊二首・其一〕卷六十五 第七冊 三七〇一頁
- 90、擊壤歌太平〔入梅〕卷六十六 第七冊 三七五〇頁
- 91、要使新民識太平〔賽神〕卷六十七 第七冊 三七七四頁
- 92、惟有天知太平事〔感中原旧事〕卷六十七 第七冊 三七八四頁
- 93、太平氣象方如許〔冬晴〕卷六十九 第七冊 三八七二頁
- 94、似是天教樂太平〔春遊〕卷七十 第七冊 三八八九頁

- 95、太平無象今有象〔書村落間事〕卷七十 第七冊 三八九一頁）
 96、太平人物自諧〔閑遊所至少留得長句五首・其三〕卷七十二 第七冊 三九六九頁）
 97、麥熟逢人樂太平〔病起初夏〕卷七十六 第八冊 四一四九頁）
 98、為吾君樂太平基〔即事四首・其二〕卷七十七 第八冊 四一八八頁）
 99、立談能立太平基〔說史四首・其三〕卷七十七 第八冊 四一九六頁）
 100、婦畔願太平〔夜雨〕卷七十八 第八冊 四二五四頁）
 101、但願時太平〔道上見村民聚飲〕卷七十九 第八冊 四二八三頁）
 102、太平固自多遺老〔書適〕卷八十一 第八冊 四三六二頁）
 103、未許吾曹醉太平〔書感〕卷八十一 第八冊 四三六六頁）
 104、畔樵樂太平〔老歎〕卷八十二 第八冊 四四一六頁）
 105、悠然心太平〔書適〕卷八十三 第八冊 四四五九頁）

なお、詩題に「太平塔」〔劍南詩稿〕卷八〕と題する作品があるが、固有名詞であることから今回は数に入れなかった。

